

*title[わいろ] *author[夏目漱石]

私「わたくし」はその人を常に先生と呼んでいた。だからここでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚「はば」かる遠慮というよりも、その方が私にとって自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」といいたくなる。筆を執「と」つても心持は同じ事である。よそよそしい頭「かしら」文「も」字「じ」など

はとても使う気にならない。

私が先生と知り合いになつたのは鎌「かま」倉「く
ら」である。その時私はまだ若々しい書生であつた。

暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達からぜひ来
いという端「は」書「がき」を受け取つたので、私は
多少の金を工「く」面「めん」して、出掛ける事にし
た。私は金の工面に二「に」、三日「さんち」を費やし
た。ところが私が鎌倉に着いて三日と経「た」たな

いうちに、私を呼び寄せた友達は、急に国元から帰れという電報を受け取った。電報には母が病気だからと断つてあつたけれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから国元にいる親たちに勸「すす」まない結婚を強「し」いられていた。彼は現代の習慣からいうと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝「かん」心「じん」の当人が氣に入らなかつた。それで夏休みに当然帰るべきところを、わざと避け

て東京の近くで遊んでいたのである。彼は電報を私に見せてどうしようと相談をした。私にはどうしていいか分らなかった。けれども実際彼の母が病気であるとすれば彼は固「もと」より帰るべきはずであった。それで彼はとうとう帰る事になった。せつかく来た私は一人取り残された。

学校の授業が始まるにはまだ大「だい」分「ぶ」日「ひ」数「かず」があるので鎌倉におつてもよし、帰

つてもよいという境遇にいた私は、当分元の宿に留「と」まる覚悟をした。友達に中国のある資産家の息「むす」子「こ」で金に不自由のない男であつたけれども、学校が学校なのと年が年なので、生活の程度は私とそう変りもしなかつた。したがつて**furigana*「人」「ひとり」ぼつちになつた私は別に恰「かつ」好「こう」な宿を探す面倒ももたなかつたのである。

宿は鎌倉でも辺「へん」鄙「び」な方角にあつた。

玉「たま」突「つ」きだのアイスクリームだのという
ハイカラなものには長い暇「なわて」を一つ越さな
ければ手が届かなかつた。車で行つても二十銭は取
られた。けれども個人の別荘はそこここにいくつで
も建てられていた。それに海へはごく近いので海水
浴をやるには至極便利な地位を占めていた。

私は毎日海へはいりに出掛けた。古い燠「くす」

ぶり返った藁「わら」葺「ぶき」の間「あいだ」を通り
抜けて磯「いそ」へ下りると、この辺「へん」にこれ
ほどの都会人種が住んでいるかと思うほど、避暑に
来た男や女で砂の上が動いていた。ある時は海の
中が銭「せん」湯「とう」のように黒い頭でごちゃご
ちゃしている事もあった。その中に知った人を一人
ももたない私も、こういう賑「にぎ」やかな景色の
中に裏「つつ」まれて、砂の上に寝「ね」そべってみ

たり、膝〔ひざ〕頭〔がしら〕を波に打たしてそこいらを跳〔は〕ね廻〔まわ〕るのは愉快であつた。

私は実に先生をこの雑〔ざつ〕沓〔とう〕の間〔あいだ〕に見付け出したのである。その時海岸には掛〔かけ〕茶〔ぢや〕屋〔や〕が二軒あつた。私はふとした**furigana*〔機会〕〔はずみ〕からその一軒の方に行き慣〔な〕れていた。**furigana*〔長谷〕〔はせ〕辺〔へん〕に大きな別荘を構えている人と違つて、

*furigana[各自][めいめい]に専有の着[き]換[がえ]場[ば]を拵[こしら]えていないここいらの避暑客には、ぜひともした共同着換所といった風[ふう]なものが必要なのであつた。彼らはここで茶を飲み、ここで休息する外[ほか]に、ここで海水着を洗濯させたり、ここで鹹[しお]はゆい*furigana[身体[からだ]を清めたり、ここへ帽子や傘[かさ]を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持

物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へはいる
たびにその茶屋へ「いつ」切「さい」を脱「ぬ」ぎ棄
「す」てる事にしていた。

私「わたくし」がその掛茶屋で先生を見た時は、
先生がちょうど着物を脱いでこれから海へ入ろうと
するところであつた。私はその時反対に濡「ぬ」れ
た**furigana*「身体」「からだ」を風に吹かして水から上
がつて来た。二人の間「あいだ」には目を遮「さえぎ」